

これからの
「中高連携」の
あり方を語る

中高と地域が連携し、 生徒がこれからの時代を 生きる力を豊かに育む

社会の変化とともに教育のあり方も変化する中で、中高連携には何が求められているのだろうか。中高連絡協議会を発足させ、定期的な交流を図るなど、中高連携に積極的に取り組む茨城県古河市の中学校・高校の校長、そして地域の保護者が、中高連携のこれからについて語り合った。

中高の教師の対話

よりよい学びの構築を目指して

市内の中高が 「地教地育」で連携

森田 昨年度、茨城県古河市内の中高連携活動として、9つの中学校、5つの高校、そして1つの県立中等教育学校の校長15人で組織する「古河市内中学校長・高等学校長協議会」が発足しました。この協議会は、地域の子どもたちを地域で教育し、地域で育てる「地教地育」を目指すものです。従来、地域における中高連

携は、中高の教師にPTA会長や警察、民生委員などが加わった、生活指導を主目的とした取り組みが中心でした。しかし、この協議会では、生活指導にとどまらず、学力保障や地域活性化など、幅広い視野で、中間の情報交換を行っています。
福島 古河市は東京都や埼玉県などへの交通アクセスがよいため、近年は、地元の高校ではなく県外の高校に進学する生徒も増えています。この状況に対する危機感が協議会発足

へとつながりました。生徒の県外流出に歯止めをかけるというねらいもありますが、現実として地元に進学する子どもが減り高校の入試倍率も低くなる中で、多様化・多層化が進む生徒たちと向き合うためには、高校として中学校で行われている指導を知る必要があります。
森田 協議会の活動の中で、私たち中学校教師が特に興味深く取り組んでいるのが、高校の授業参観です。高校で行われている授業の様子や、私たちが送り出した卒業生が学習に取り組む様子を知ることができるといえるのは、非常に貴重な機会で



す。特に、中学校では活躍する場面が少なかった生徒が、高校では生き生きと授業に参加し、クラスでもリーダー的な存在になっている姿を見た時は、「この高校に送り出して本当によかった」という大きな喜びを感じました。そして、中学校の三者面談などで「先輩がこの高校で立派に活躍しているよ」と生徒、保護者に話すことにより、進路指導の納得感をさらに高めることができてい



古河市立総和北中学校 校長

森田 泰司 もりた・やすし

教職歴33年。同校に赴任して1年目。「真の意味での『子ども一人ひとりのために』。教育はまさに『人づくり』そして『国づくり』。」

古河市立総和北中学校◎1978（昭和53）年創立。校訓「礼節・鍛錬・克己」のもと、歴史と伝統を大切に引き継ぎ、地域や保護者の期待に応える教育活動を進める。文部科学省ICT教育研究協力校。

ます。

福島 高校生の様子を見た中学校教師の喜びを高校教師にも伝えてもらうことは、高校教師の指導の原動力にもなっています。また、高校の授業参観には、中学校の教師だけでなく、協議会に参加するほかの高校の教師も参加します。実は高校教師にとっても、ほかの高校の授業を見る機会というのはほとんどないのが実情です。生徒の志望や学力が異なる



茨城県立古河第三高校 校長

福島 克郎 ふくしま・かつお

教職歴36年。同校に赴任して2年目。「常に生徒のためを第一に考える」「困難から逃げると、より大きな困難が追ってくる。だから逃げない」

茨城県立古河第三高校◎1969（昭和44）年創立。2016年度入試では、国公立大は、茨城大、埼玉大、千葉大、九州大などに50人が合格。私立大は、青山学院大、法政大、明治大などに延べ574人が合格（現浪計）。

る学校が、同じ地域の生徒を育てようとしている様子に直に触れることで、ともに地域の子どもを育てているのだという連帯感が増します。また協議会では、中高の教師が互いの学校のことをざっくばらんに語り合う機会も設けられていますが、中学校教師と話していて、特に高校との違いを感じるのは、生徒との距離の近さです。もちろん生徒数の違いもありますが、ここまで生徒一人ひとりのことを知っているのかと驚きました。そして私たちは、中学校でこんなに大切に育てられてきた生徒を引き継いで預かっているのだという責任の大きさを改めて感じています。

教育改革が進む中、中高連携はさらに重要性を増す

森田 中学校教師の側も、高校の様子をもっと知りたいという思いはこれまで抱いていました。しかし、高校入試が垣根となり、「ともに生徒を育てる関係」というよりも「選ぶ側と選ばれる側」という意識になっ



2016年9月に実施された古河市内中学校長・高等学校長協議会では、高校を訪問し、英語の習熟度別授業などを見学した。

てしまい、交流が図りにくかったように思います。その結果、中学校の教師の中にも「高校に送り出したら、あとは高校に任せればよい」という意識が少なからずありました。ですから、協議会という制度ができたことで、連携に向けて背中を押してもらえたように感じています。実際、協議会が発足して、中高の管理職が互いの学校を気軽に訪れるようになっていきます。

福島 生徒を間に置くことで、中学校と高校が互いを認め、高め合う

関係へ、そして地域をともに盛り上げていく関係へと大きく進化しているように感じます。

森田 少なくとも、地元の高校を卒業するまでは生徒を見守ろうという意識を中学校の教師が持つことは、地域の教育力を高めることになり、地域の活性化にもつながると思います。

福島 中学校と高校の連携は、近年進む教育改革への対応という意味でも重要だと考えています。特に、アクティブ・ラーニング（以下、AL）が求められる中で、主体的な学びに必要な学習への動機づけと、生徒の志望を実現するための学力保障を両立させるために、高校教師が中学校の授業から学べることは少なくありません。ALという共通のテーマを前に、中高の教師がお互いのよいところを学び、授業力を高め合うことができれば、高い教育力を誇る「中高一貫地域」になれるのではないのでしょうか。

森田 古河市は小中学校がICT教育に先進的に取り組んできましたが、そこで培ったノウハウは高校でのICT教育の推進にも役立つはず

です。高い専門性を持つ高校の先生が、ALの実践事例や方法論を始めとする授業改善のヒントを中学校の指導からも得ていただき、専門性を土台にした、より魅力的な授業の実現につながればと思います。

福島 中高連携は、これからますます多くの観点で取り組める可能性を秘めていると思います。私は英語科の教師でしたが、以前は中学校の指導に対して一方的に疑問を持つこともありました。しかし、協議会で中学校の教師たちと話す中で、「まずは、中学校での指導の実態とその背景を正しく理解することで、ともによりよい指導のあり方を考えていくことができるのではないか」と考えるようになりました。

森田 公立高校だけでなく、私立高校とのかかわりも、キャリア教育の観点で見直すことができます。例えば、本校の3年生対象の進路学習会では、本校卒業の公立・私立高校の生徒を招いて話してもらっています。先輩たちの生の声を聞くことで、進路実現に向けての心構えや学習方法について考えを深める機会になっていると思います。

教師と保護者の対話

ともに未来をつくるために

多彩な連携、かかわりで生徒に地域への愛着を育む

―地域の中学校と高校の連携を、地域の人々はどのように見ているのだろうか。2人の保護者にも話を聞いた。

鶴見 古河市の「地教地育」という考えは、中長期的な視点での人づくりであると同時に、教育の領域に存在する見えない壁を乗り越えようとする挑戦でもあると思います。教師と保護者の間、中学校と高校の間など、教育現場にはいくつもの壁があります。連絡協議会で中高間の壁を取り除く動きが進んでいく中で、今後は保護者の参加も認めてもらえることを期待しています。

篠崎 古河市のように、都市部への交通アクセスのよい地域にとっては特に、高校進学はその後地元に残るかどうかを決める1つの局面です。地域を守るといふ観点からも、高校にはもつと保護者と子どもに対して学校を開き、教育理念やカリキュラ



ムの特徴、指導の工夫などを公開してほしいと思います。高校からの情報は、その地域の教育力を判断する上で重要な要素ですから。

福島 高校はもつと中学生やその保護者と直接向き合うことが求められていると感じます。実は、中高連絡協議会の活動を経て、本校の若手教師が地域のA中学校に出向き、保護者や生徒たちの進路学習の講師を務

めました。すると、同中学校の3年生に占める本校への入学者の割合が、16年度は増加に転じました(図参照)。私たちが考えていることを、中学生やその保護者の目線で伝えていくことも、これからの中高連携において重要なことです。

森田 大学進学や就職などで、地方の子どもたちが地域を離れるのは仕方がないのかもしれませんが、それまでに地域への愛着を十分に育んだ上で、外の世界に送り出したいと思っています。高校までは「地教地育」で地域への愛着をしつかり育むことで、たとえば高校卒業後に地域から離れたとしても、いつか地域に



古河市立総和北中学校 PTA会長

篠崎克佳
しのぎき・かつよし

戻りたい、遠くにいても地域に貢献する機会をつくりたいという気持ちを持ち続けられるはずですよ。

次代を担う生徒を中高、地域が連携して育てる

鶴見 地域への愛着は、学校と地域が連携して育むものだと思います。教師の多忙さが社会的な問題になる

中、学校の先生もよき社会人、家庭人として生活を営めるように、我々保護者も先生方の努力や苦勞を知り、時には先生方に代わって行政に様々な要望を伝えていくことが理想です。

篠崎 母校を愛せる生徒を育てる

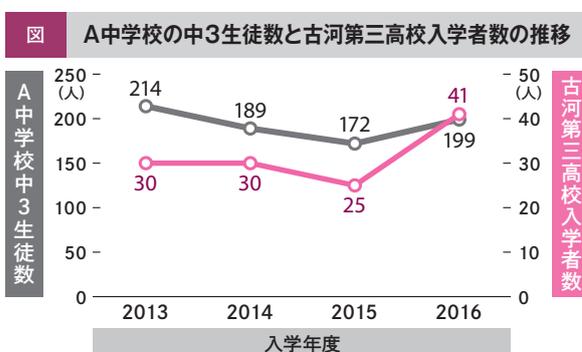


古河市PTA連絡協議会 前会長

鶴見尚司
つるみ・たかし

ことは、次の時代に、その学校を支える保護者を育てることにもつながります。私自身、総和北中学校、古河第三高校の卒業生ですが、どちらの学校にも愛着と誇りを持っていても、変わらずよい学校であり続けられるように協力していきたいと思っています。

福島 地方の公立高校である本校が目指すのは、勉強や部活動、学校行事、そしてともに学校生活を送る仲



古河第三高校の若手教師が地域のA中学校に外向き、進路学習の講師を務めたところ、同中学校の生徒数は減少する中で、入学者数が増加した。

*古河第三高校作成資料を基に編集部で作成

間も大切にできる「バランス感覚のある学校」です。生徒が多彩に潜在能力を発揮できる高校を目指していくためには、中学校や地域、保護者との多角的な連携を図り、たくさん目で生徒を見守り、育成していくことが不可欠です。

森田 小中連携や高大連携に比べると、中高連携はこれまであまり進んできませんでした。でもそれは、中学校と高校の間に連携が必要ないからではなく、当事者である我々にそうした視点が欠けていたのだと思います。これからの社会は、科学技術がさらに発達し、AI(人工知能)に多くの職業が代替されるとも言われています。人々の働き方や求められる力が変化し続けるからこそ、中学校や高校でもICTを活用したり、AIを推進したりして、生徒に次代を生きるための力を養おうとしています。社会の変化に翻弄(ほんろう)されることなく、主体的に未来を切り開く人材を育てていくために、これからさらなる中高連携を進めていく必要があると思います。